

日本におけるルバーシカ着用の起源をめぐる

小林 実

はじめに

大正十四年（一九二五）二月九日の『時事新報』朝刊二頁のほぼ中央部分に、「我等に職を与へよ」と題して、東京の上野公園でひらかれた失業者民衆大会にあつまった群衆に重ねあわせるようにして、鉢巻を額に巻き、拳をふりあげている長髪の青年のクローズアップ写真が掲載されている。この青年は上着の下に、ロシアの民族衣装であるルバーシカを着込んでいる。

また大正十五年（一九二六）頃を時代設定とした平林たけ子（たけこ）の小説「喪章を売る」（昭和二年「一九二七」三月『大阪朝日新聞』の懸賞短編小説応募作品、のち『嘲る』と改題）に、『汚れたルバーシカを着たりした連中』¹が一

瞬登場する場面があるが、この連中はストライキと称して企業相手に恐喝まがいの乱暴をはたらくアナーキストということになっている。

あるいは、大谷晃一『評伝武田麟太郎』（河出書房新社、一九八二年十月）によれば、昭和二年（一九二七）一月に、武田麟太郎が友人の藤沢桓夫に連れられて、ルバーシカを無理やり着せられている。《藤沢は次に神田の洋服屋へ連れて行き、茶色のコール天のルバーシカを買ってやった。照れ屋の麟太郎は鏡を何度も見て、気が進まん風だった。藤沢はゴーゴリもゴーリキイもエロシエンコもルバーシカを着ていたと懸命に説得し、やっと納得させた》²。この同じ頃、武田麟太郎は東大新入会に入会している。

《ゴーゴリもゴーリキイもエロシエンコも（…）》という

ことが象徴しているように、ロシア文学とロシア革命と左翼運動が、彼らのなかでひとつのイメージを結んでいる様子がうかがわれるだろう。

そしてもうひとつ。小野忠重によれば、画家山本鼎が長野県小県郡で農民美術研究所を設立し（大正八年「一九一九」）、農閑期の農村青年たちに風俗人形の作成を指導するなど、いわゆる民芸運動をおこなっていたが、大正十三年（一九二四）頃に、同研究所講師の平塚運一宛に、次のような書簡を送っている。

講習中の風采問題なのですが、信州での経験で、これは重大な問題なので、困りこんでいるのです。農村の人たちは華美な風俗に反感をもちますが、それよりも社会主義者を連想させる風俗は、最もいけないのです。村山（桂次）や山崎（省三）君が頭の毛をぼうぼうはやし、画学生風のかまわないなりで村を横行したことによって、長い間小生の事業は反感を買い、小生がロシアからこの事業を輸入したごとき思惟することとむすびついて、一時高等警察も来たことがあるくらいです。（…）ついては、あなたの好みのルバーシカ姿を講習中やめて、平凡な服装になっていただきたいのです。もし、ちょっと禅味を移入して、頭髮までも短く

して下さったら、最も幸いです。³

長髪でルバーシカ姿の青年といえは社会主義者を連想させるということが、この時点ですでに信州の農村にまで浸透していたことである。この文面を読む限り、宛先の平塚運一をはじめとする画学生たちは、むしろ政治問題には無頓着で、単に好みからルバーシカを着ていたようであるが、世間からは社会主義者だと疑われてしまうようである。ここから、ルバーシカがもつイメージが、画学生たちの思惑とはかわりなく、世間では社会主義者の衣裳として受け取られる風潮ができていたことがわかる。

おそらく類例は、まだたくさん見つかると思われるが、このように大正末期から昭和初期にかけて、一部のインテリ青年のあいだに、ロシアの民族衣装を身にまとう風俗が流行ったということは、今日でも映画やテレビドラマなどの時代考証のなかで、しばしば目にする。しかし、これがいったいなんだったのかということは、管見によるかぎり、これまで、まともに取り上げられてこなかった。

この風俗を左翼青年たちが積極的にとりいれていたということは、おそらく大正六年（一九一七）に起きたロシア革命の記憶と、深く関わっているだろう。今日では教科書のなかの出来事となっている「ロシア革命」も、その起こっ

た当時にあつては、生々しい「事件」だった。その衝撃のほどは、当時を生きていない我々には、なかなか推測し難い。

だが、衝撃の余波は必ずその痕跡を残しているものである。日本の青年たちが、こぞってロシアの民族衣装を身にまとい始めたという奇妙な事実は、何か大きな原動力が、そこにあることを予測させる。その原動力こそ、事件のインパクトにはかなるまい。

以下、この風俗現象をもとに、日本のインテリ青年に及んだロシア革命の衝撃の様子を、描き出してみようと思う。

ロシア革命

周知のように、いわゆるロシア革命は、二度の段階を経て行われる。一九一七年三月八日（露暦二月二十三日）の国際婦人デーにおける婦人労働者デモをきっかけとして、首都ペトログラードにおこったゼネストを背景に、大衆デモと軍隊の反乱によってロマノフ王朝が転覆し、やがて進歩党のリヴォーフ公を中心に臨時政府が樹立された（二月革命）。しかし第一次世界大戦をめぐって、継続を主張する自由主義者と、国内安定のために停戦を主張する労働者・

兵士ソヴェート（ソヴェートとは、組合、協議会といった意味）とのあいだで対立が生じ、臨時政府は崩壊と再編成をくりかえす。その過程で、東部戦線の勝利によってしか平和はもたらされないと主張するケレンスキーが台頭してきて、露暦七月の第二次連立政府（Ⅱ第三次臨時政府）で首相に就任するが、右派と左派のあいだにたつて不安定な政權運営を余儀なくされる。やがて強力な政府を主張する右派・軍部を背景とするコルニーロフ將軍の反乱がおこり、窮地に陥ったケレンスキーが全国のソヴェート組織に支援を要請したことをきっかけに、社会主義各派が力を強めはじめた。こうしてレーニン率いるボリシェヴィキが勢力を拡大して、ついに十一月七日（露暦十月二十五日）の第二次全ロシア労兵ソヴェート大会当日、ペトログラードの守備隊や重要施設がソヴェート支持を決議し、臨時政府派の部隊が排除されることで、首都が同大会の統制下に入り、多数派のボリシェヴィキが事実上政權を掌握するのである（十月革命）。

最初の二月革命の際は、王朝政治の腐敗が深刻化し、革命到来の危機はすでに前からささやかれていたこともあつて、《三百七十年続いた帝政は驚くほど速く、抵抗をほとんど受けることなく一九一七年二月末（旧暦）に倒れた》⁴

のである。当初デモ隊と軍隊との衝突による烈しい攻防戦がくりひろげられたが、その混乱も早々に収拾し、臨時政府の路線が議会制民主主義をめざすものであることと、第一次大戦の継続を指示する方針をとっていたことから、アメリカや連合諸国からいち早く支持を得ることに成功した。

いっぽう十月革命は、これとはまったく対照的な展開がすすんでいる。《首都における十月革命は、二月革命と異なり、大規模な軍事衝突をとまなうことはなかった》⁵。わけだが、その後数年間にわたり内乱がつづき、さらにレーニンの政府が独壊との単独講和を主張したこと、そして世界最初の社会主義政権にたいする反発から、連合各国の反応は冷たいものであったばかりでなく、周知のとおり、捕虜としてシベリアにとり残されたチェコ軍救出の名目でシベリア出兵の災禍にすまみまわれている（一九一八年）。

この二度の革命にたいする日本政府の反応も、ほぼ各国の動きにならっているといつてよい。二月革命のときは、大陸政策の関係から帝政時代にむすんだ日露協商のゆくえを危ぶむ本野一郎外相の意向がはたらいて、やや出遅れたものの、それでも三月二十七日の閣議で米英仏伊に追隨して臨時政府を承認することを決定している⁶。新聞報道の

もようをみても、臨時政府がほぼ政権を掌握した直後の三月十六日ごろからようやく政変の模様がつかえられ、数日間は退位したニコライ二世とその一家のことや、事件の経過などに関する記事が散見するが、それもしだいに少なくなり、その月の終わりごろまでにほぼ革命に関する記事はすがたを消す。その間半月に満たない短時日である。そのかわり新政府の形成や、世界大戦での露軍の展開にかんする記事がとつてかわり、革命は一事の混乱にすぎず、「ロシア」という国家そのものは継続しているのだと、読者には印象づけられる。ロシア国内での事態の早期収拾と、連合国側の意向に沿った外交姿勢が、腐敗した旧体制にかわる頼もしい刷新として伝えられているのだといえよう。

ところが、連合諸国の利害と真っ向から衝突する十月革命については、ソヴェート大会が首都を制圧した二日後からすでに、新聞紙面に《過激派露都支配》（『東京朝日新聞』十一月九日）という文字が踊っている。ボリシェヴィキを「過激派」と表現することについて原暉之は、この文字が五月末ないし六月上旬から紙面にあらわれはじめる点に着目し、それが穏健社会党にたいする過激社会党の意味でもちいられていること、そして《折しもレーニンに率いられた党が大衆闘争の場裡に独自勢力として登場してきたこと

の衝撃を特派員たちはこの用語で表現したのである」⁷と述べている。十一月の事件を「過激派」の首都支配と報道することは、つまりあくまで諸党派のうちのひとつではないボリシェヴィキがひきおこした事件として扱おうとする新聞側の姿勢がみられるのである。事件にたいして、「革命」という語ではなく「政変」という語がもちいられていることも、その姿勢の表れであろう。

しかしこの一連の革命騒動は、新聞紙面が伝えるように大戦下の国際均衡の変化という政治的問題もさることながら、むしろ史上初の社会主義政権の誕生によって「世界をゆるがした」⁸。思想的な事件であるということこそ歴史的に重要であることは、いまさらいうまでもない。

大正デモクラシー

のちにこの時代をふりかえって麻生久は、『黎明』という小説を書いた（新光社、大正十三年「一九二四」三月初版）。舞台は大正七年（一九一八）四月から翌年六月までの東京で、当時勃興しつつあった労働運動に身をささげる青年たちの姿を描いた作品である。そのはしがきに、次のように書かれている。

五ヶ年の長きに互る陰惨な世界戦争は、欧羅巴の社会生活を殆んど破滅的な混乱に陥れたのであるが、其混乱の渦巻きの中からは一つの新しい世界的現象が生れ出た。その新しい世界的現象とは社会問題の勃興と云ふ事であつた。換言すれば社会運動の勃興と云ふ事であつた。大正六年早々に露西亞の旧社会が破滅し、続いて七年の秋には独逸に革命が起り、其余波は諸国に及んで、全欧羅巴を挙げて社会革命の巷と化せんとする情勢を示したのである。

（「はしがき」二頁）

麻生はここで、一連の革命運動を『新しい世界的現象』のあらわれとして位置づけているが、ロシア革命がもたらした最大のインパクトは、この「新しさ」の実現にあったといえる。そして特に若い世代が、そこに共鳴していったということが、ひとつの特徴としてあげられる。麻生はこゝも書いている。

それは恰かも夢の様な時代であつた。新しい世界思潮にめざめた若者達は、其激しい潮の流れに棹さして、止まるどころも知らぬやうに進んで行つた。其勢ひは堰を決した水流が、滔々として流れ出る様なものであつた。先駆して其流れに棹さした青年達は、声高

らかに叫んだ。

自由平等の理想社会！

彼等は、其言葉に酔ひ、其文字に熱狂した。

(同三頁)

物語は、その熱狂にのみ込まれた二人の青年の登場からはじまっている。

大正七年（一九一八）四月のある日の夕方、東京上野公園前の停留所に降り立った二人の青年が、何か熱心に語り合いながら、肩を並べて公園のなかへと歩いて行く。

その切れ／＼に聞こえる話の中には、次の様な言葉が、幾度となく繰り返される。そして其言葉は、一きはめだつて強く響く。

……露西亞……レーニン……革命……ボルシエビツキー……プロレタリアー……共産主義……神秘的現実主義……露西亞人……露西亞の国民性……西比利亜……モスコー……ペトログラード……ソビエツト……露西亞文学……ゴーゴリ……トルストイ……ツルゲネフ……虚無主義……ヘルチエン……クロボトキン……バクーニン……ゴールキー……あ、何と云ふ偉大な謎だ……人類……戦争……

(九頁)

十月革命について語り合っているとされるこれらの言葉の連想が、共産主義からロシア文学へとつり、やがてニヒリスト（虚無主義）、社会主義（ヘルチエン・ゲルツェン）、アナーキズム（クロボトキン、バクーニン）というように、十九世紀ロシアを代表する社会思想とその思想家たちの名前が想起される。同様の思考パターンは、少し先の会話場面でもみることができる。

『露西亞人て奴あ、まあ何て偉大な馬鹿なんだろう。

それにレーニンの性格の素ばらしさつたらどうだ。レー

ニンは君、長い間の陰惨な露西亞の革命運動が築き上げて来た露西亞特有の偉大な人格だ！ あのツルゲネフに現れて来るインテリゲンチアの無数の失敗が遂にレーニンの性格を生んだんぢやないか』

『さうだ。レーニンは露西亞の土と血に染められた長い革命の歴史が生み出した一人格だ』

と、Oは壁の方を見つめ乍ら感慨深か相に云つた。

(四四頁)

社会主義革命のイメージが、レーニンの名の下に一举にロシア思想史のなかに回収されてしまっていることがよくわかるだろう。これはあくまでフィクションのなかでのことであるが、現実の社会運動の流れも、ロシアをイメージ

した社会主義運動への傾斜が目立つようになってくるのである。

大正五年（一九一六）一月の『中央公論』に吉野作造の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」が発表され、にわかに「民本主義」をめぐる議論がさかんになり、時代は「大正デモクラシー」の様相を呈することになるが、その吉野を中心に、「民本主義」を共通の立場とする知識人たちが集まって「黎明会」という啓蒙団体が結成された（大正七年「一九一八」十二月）。

第一次世界大戦後の世界の新趨勢に順応して、社会問題の解決に貢献しようという目的をにかけて、講演会をひらき、その速記録である『黎明運動』を刊行するといった事業がおこなわれたが、この黎明会発足に呼応して、吉野傘下の東京大学法科大学学生を中心に、新人会という学生団体が同時期に結成され、やがて早稲田大学の民人同盟会や、第一高等学校の社会思想研究会といった同様の学生団体の発生をみるようになる。周知のように、この学生団体の方は大人たちの黎明会の枠をこえて、しだいに急進化の方向へと突き進んでいく。

その過程について三谷太一郎が、『デモクラシー』（大正八年三月～十二月）から『先駆』（大正九年二月～八月）

へ、『先駆』から『同胞』（大正九年十月～大正十年五月）へ、さらに『同胞』から『ナロード』（大正十年七月～大正十一年四月）へと移り変ったことは、そのまま新人会の思想的移行に対応していた¹⁰と指摘しているが、『同胞』という名は「同志」という革命用語を連想させるし、『ナロード』にいたっては、まさにロシア語である（ナロードは人民、庶民を意味する語）。

ただし、三谷の指摘からはもれているが、黎明会のメンバーでも、社会主義に近い立場で参加した者のなかには、学生たちと同様に急進化していくものもいた。なかでも経済学者福田徳三は、当時最左翼に位置したと思われる。そして熱狂的なレーニン信奉者であった。彼が大正十一年（一九二二）九月に改造社から出した『ボルシェヴィズム研究』は、ボルシェヴィキをもって正當なマルクス主義であると主張する、かなり早い時期の書物である。

マルキシズムとしてのボルシェヴィズムの研究は、問題が明瞭に又た狭く限局せられて居る。何故となれば、ボルシェヴィズムは、少なくともレーニンは、（並にトロツキー及ラデツクを含む、ブハリンに至つては必ずしも然らざる如くに思ふが、今は論ぜず）マルキシズムの重なる学説の甚だ多くを、少しも討論の題目

とすることなく、全く其一般に認められて居る形其俣に之を祖述し、承継するものであるからである。即ち此等の点に就てはマルキシズムとしてのボルシエヴィズムなる命題は全然無用の事に属し、ボルシエヴィズムは疑ひもなく正真正銘のマルキシズムであることは、些の疑を容るゝ余地はないのである。

(三四―三五頁)

こうした日本のマルクス主義陣営内でのボルシエヴィキの正当化は、周知のように、一九二七年（昭和二）のコミンテルン日本問題決議（二十七年テーゼ）によつて決定的となるわけだが、マルクス主義においてロシアのボルシエヴィズムを特化しようとする傾向は、この福田の例にみられるようにすでにそれ以前から顕在化しており、おそらくモスクワでコミンテルンが開催されだす（一九一九年「大正八」）ことや、ソヴェート連邦が成立する（一九二二年「大正十一」）こと、また日ソ国交回復（一九二五年「大正十四」）などといった、ソヴェート政権の安定化と国際的承認の流れに沿うものであっただろう。だが、とりあえずは、ロシアで革命が起きたということが、その後の歴史の流れを決定したという事実の大きさを確認できればよい。

コスモポリタン

そのひとつの傍証として、『黎明』の一場面があげられよう。先にみたように大正七年（一九一八）を時代設定とする冒頭場面で、ふたりの青年が登場するが、そのうちのひとりが、自宅でルバーシカに着替える場面がある。

彼は東京鷺谷近辺の西洋館の一室を間借りしており、次のような部屋にくらしている。

室の大きさは八畳位い。その片側にはベッドがあつた。長い寝椅子があつた。丸いテーブルが室の真中にあつた。そのテーブルには気の利いた、配合のよくとれたテーブル掛けがかゝつてゐた。そして細長い面白性格好をしたグラス製の花立には美しい西洋花が投げ込まれてゐた。壁には本棚が造りつけられてゐて、その中にはぎつしりと洋書が詰め込まれ、その余りは一つの窓の下にある勉強机の上に山の様につまれてゐた。その机の上には又、書きかけの原稿用紙や蓋のとれた俣のインキ壺や、ペンや、その他様々なものが、いっぱい散らばつて、如何に此の机が現在活動しつゝ、あるかを示してゐた。本棚の上の壁には、あの有名なボル河の曳船の画を入れた額ぶちがかゝつてゐた。も一つ

の方には雑誌から切り抜いたらしい、小さなレーニンの写真がかゝつてゐた。そして長椅子の上にはマンドリンが転がつてゐた。

(一四頁)

イスとテーブルの生活をおくり、本人の趣味かどうかはわからないが、花瓶には西洋花がさしてある。そして壁にはレーニンの肖像写真と、有名なレーピンの「ボルガの船曳」がかかつており、西洋風の生活様式にロシア臭さを加味した様子が描かれているわけである。マンドリンは、明治末から大正期にかけて青年たちのあいだで流行つたものだが、時代の空気を伝えるアイテムとして作者が添えたのか、あるいはモデルとなつた人物の部屋に実際においてあつたのかもしれない。この部屋に招待された友人は、ここで青年がルバーシカに着替えるところを目撃する。

微笑し乍ら、此狭い室の物珍しい光景を一つ／＼食ひ入る様に熱心に眺めてゐた肥つた方の青年の眼は、廳で、ベッドの傍で着物を着かへてゐる此室の主人公の上に落ちた。彼は此時身早く、その黒い汚い服を脱ぎ棄て、だぶ／＼したネルのズボンを着き、妙な格好をした、これも同じくだぶ／＼したシャツの様なものを頭からすつぽりとかぶる処だつた。それを見ると肥

つた方の青年は叫んだ。

『おい、君の着てゐるその妙なシャツの様なものは、いつたい何だい』

『ルバーシカ……』

此室の主人公は、未だすつかり這入り切らぬその袋の様なルバーシカの中から叫んだ。

『何だルバーシカつてそんなもんかい』

『さうだ。ルバーシカつて之れさ。露西亞の奴は皆原始的だよ、併し何て着心がいい、んだらう』

今度はもうすつかり首を出して、胸のボタンをとめ乍ら如何にも気持ちよげに、此室の主人公が云つた。

(一四―一五頁)

ここから、ルバーシカはまだ東京でも、その名はきこえているが実物を目にすることは珍しかったということがわかる。しかしそれをもつ意味合いは、確実に表れている。

この青年は、頭からかぶつてボタンを留めるだけで、しかも着心地がいいというルバーシカの合理性にその優れた点をみとめている。しかもその優位性は《露西亞の奴は皆原始的だよ》というように、ロシアの文物全般にまでおよんでいる。

その彼はコスモポリタンを自称しており、風変わりな生

活様式はその実践を意味していた。彼の食生活は次のようなものである。

『君、一寸待つて呉れ、今日はコツクの女もゐないから、今僕が飯をつくつて来るよ。面白いものを食はせるぞ』

『飯をつくる？ 君がかい？』

『なんでもないんだ、ヂヤガ芋の甘い奴があるんだ。』

僕はもうすっかり米を食ふ事を止めたんだ』

『米を食ふ事を止めた？ 何時から？ 何故？』

『もう半年位ゐにはなるよ。何故つて、米を食ふと、腹ばかりふくれて眠くなつて頭が悪くなるよ。日本人が電車で居眠りばかりやるのは、ありや君、米をうんと食つて、味噌汁をたらふく飲んで、沢庵をぼり／＼やるからさ。それに米の通用するのは、世界中でほんの僅かばかりだからなあ。我々コスモポリタンは米から超越する事が必要さハ、ハ、ハ』

(一六頁)

『米から超越する』というのは、もちろん日本の生活を廃することを意味する。日本の伝統的生活様式を棄てて、新しいスタイルを獲得しようというのである。このコスモポリタンの生活のなかに、先にみたようにロシア的なもの

が取り入れられているという点が、我々の注意をひく。

よくみると彼は米食を廃して、まだ半年しかたっていない。大正七年（一九一八）四月末の半年くらい前というところ、ロシアの十月革命が、暗に示唆されていると思われる。コスモポリタンとロシアのイメージが結びついているという点から、因習を打開する新しいイメージとして、ロシアという国家とその文化が、当時の青年たちに絶大なインパクトを与えていたことが、このフィクションのうちにうかがえるのである。

演劇

ところで、ルバーシカによる「ロシア」イメージの喚起ということとは、すでに演劇の世界では、十月革命に先立って成立していたとみられる。

島村抱月ひきいる芸術座が、『復活』を舞台にかけたのは、大正三年（一九一四）三月二十六日から六日間にわたる帝劇での公演が最初であった。その後、『直ちにこのカチューシャ劇を看板に「サロメ」「嘲笑」「熊」を持つて、四月十六日初日の大阪浪花座興行を振り出しに、京都の南座から神戸、長野、富山、金沢、岐阜等をはじめて巡業し、

七月に帰京したが、この旅興行は各地とも非常な人気で、とり分け南座は連日大盛況であつたし、長野と富山の公演も素晴らしい好成績であつた¹¹。この一世を風靡した「カチュシヤ劇」にたいして、抱月のライバルともいえる小山内薫が、『この間、芸術座の『復活』を見た時、出て来る百姓が一人もルバアシカを着ていないので、私はイルウジョンを八分通り削がれた』（『演劇と地方色』『演芸画報』大正三年「一九一四」七月）と批判のことはを寄せている。

周知のとおり、小山内は大正元年（一九一二）十二月から翌年八月にかけて、ロシアをはじめとするヨーロッパ諸国をめぐる観劇旅行をおこない、当地の演劇スタイルを日本でも実現することに死命を燃やしていた。じつさいにロシアの実情を目にした小山内の視線からみれば、抱月の芸術座がだした『復活』には、どこにもロシアらしさが見当たらなかったわけである。のちに彼は、こうも言っている。

「……「カチュシヤの唄」は忽ち有名になりました。東京は勿論、京都、大阪——凡そ何処へ行つても、「わかれの辛さ」を聞かない土地はないようになりました。もうそうになると、トルストイありません。『復活』もあります。ネフリウドフありません。日本の唱歌「カチュシヤの唄」があるだけです。¹³

（『生ける屍』についての論議）
そもそも小山内はヨーロッパに行く前から、外国劇を本場のようすにできるだけ近づけて演出することに心をくだしていた。明治四十三年（一九一〇）六月の第三回自由劇場試演で、ゴリキーの『夜の宿』（『どん底』）をおこなった直後、彼は次のような苦労話を語っている。

帽子は余程ロシア式にしなければならなかったが、日本ではそれもなかなか困難である。向うの労働者の被る海軍帽のような帽子の古いのを二つハルビンから送って貰ったが、それは木賃宿の主人と靴屋のアリヨシカに被せることにする、この帽子は裏が汗染みて臭く冷たい。それでも一つについて一ルウブルずつ払ったのだ。その外の帽子はみんな小道具の持つて来た中から選ぶ。

靴は大抵小道具の持つて来たもので間に合せる。ルカと帽子屋との履く草鞋はハルビンから送つて来た本物である。併しあれは中流の職人が穿く革製の奴で、最下等の職人が穿く樺の皮で作ったものではない。脚絆は向うの絵や写真を手本にして、木綿の布を巻きつけることにする。¹⁴

（「自由劇場第三回試演」）

すでに宮下啓三・小平麻衣子が指摘しているように¹⁵、その際参考にされた写真は、ドイツ語やフランス語の訳本に掲載された舞台写真や、モスクワ芸術座の二枚の写真絵葉書であるが、まさにわずかな絵や写真だけをたよりに、手探りでロシア的な雰囲気がつくられていたのである。そしてこのとき彼は、やつと二枚のルバーシカを手に入れている。

これもロシアのシャツが得られないから困る。「白樺」の里見君がくれた縁に赤い糸で縫のしてあるロシアのシャツ二枚はあるが、その外には何もない。この二枚は、一枚をベベルに着せ、一枚を役者〔役名——引用者注〕に着せることにする。あとは在り合せの日本物で合す。¹⁶

(同)

どういう経緯で里見弴がルバーシカを入手したかは未詳だが、こうした特別な伝手でもないかぎり、まだ一般的には手にすることが困難であったことがうかがえる。ただ、見てのとおり小山内の苦労は、帽子や履物にまでおよんでおり、ルバーシカばかりが問題とされているわけではないところから、明治四十三年（一九一〇）の段階では、ルバーシカが突出してロシア的なイメージを象徴していたわけ

はないようである。大正三年（一九一四）の芸術座の無頓着さも、おそらく「ロシア」特有のイメージが明確化していなかったことを示しているのではないだろうか。

ところが、大正六年（一九一七）十月三十日から一週間の、まさにロシア十月革命直前に偶々おこなわれた芸術座第九回公演の『生ける屍』（トルストイ原作、川村花菱脚色）では、逆に必要もない箇所でルバーシカが使用されているということ、小山内が批判している。『復活』から三年のうちに、小山内の自由劇場におくられて、芸術座もルバーシカの使用をおぼえたのである。

ジプシイ——ツキガン——の家のテント張りにも驚いた。多分、フランス出来の活動写真か何かから考えた事だろうが、ロシアでツキガンの歌を聞きに行く所は、こんな粗末なところじゃない。「ト」書を見たまえ。「卓上にはシャンパンの瓶」とある。兎にも角にもシャンパンだ。ドイツの或都市でこの芝居をやった時、この場へ出る客がみんな燕尾服を着ていたというのも、あまりに遣り過ぎだが、芸術座のそれがみんなルバーシカなのも酷い。フェエデヤのチョッキキなどとは、彼を労働者とも思っただのらう。¹⁷

（『生ける屍』についての論議）

だが、この芸術座の『生ける屍』は、須磨子に「行こか、戻ろか、極光の下を、露西亞は北国、はてしらず……」云々という「さすらひの唄」（北原白秋作詞、中山晋平作曲）を歌わせ、またしても興行的大成功をおさめるのである¹⁸。これは『復活』以来、芸術座の常套手段となっていた。

『復活』以後のあなた方は、もう西洋のどんな優れた作家にも、どんな有名な脚本にも、少しも「恐れ」などは感じないようになられたようです。「須磨子を中心として、センチメンリズムで観客を捉まえる事」唯それだけがあなた方の為事となったようです。

唄で味をしめたあなた方は、ツウルゲネフの『その前夜』を芝居にして、その中へ吉井勇氏作の『ゴンドラの唄』というのを挿み込みました。その次には、『アンナ・カレニナ』を芝居にして親子の対面で見物の涙を——そして財囊を——絞ろうとなさいました。¹⁹

（同）

そして小山内のいらだちをよそに、この芸術座の作り上げたセンチメンタルなロシア・イメージこそが、大衆にひろまっていくのである。

むすび

しかし、いくら芸術座がロシア人のルバーシカ姿を大衆にひろめたとしても、日本人の生活様式のなかにロシアの様式が浸透するまでにはいたらない。それは、先にみた山本鼎の書簡が報告している農村のひとたちの反感をみれば明らかだろう。あくまで芝居という祝祭空間のなかで「ロシア」の世界が演出されたように、日本の日常世界においてロシア的なものは、あくまで非日本的なものにすぎないのである。

このインパクトから政治的な側面を払拭して残るのは、先の山本鼎の書簡に登場する、いささか無頓着な画学生たちのルバーシカ姿にうかがえる、単なるエキゾチズムの新鮮さではない。

そうした点にもっとも意識的だったのは、詩人の北原白秋である。彼の「葛飾文章」（『中央公論』大正八年「一九一九」三月）に、次のような一節がある。

ある朝、かなりお洒落な私は、クリーム色のルパシカに露西亞の地主気取で紅い細紐を前結びにし、爽かな夏帽子に、軽々と新しい手籠を擁へて、川の向うのIといふ田舎街まで、口笛を吹き吹き、肉類や野菜

物の買出しに行くのであった。

舞台設定は白秋が自身住んだ東京の小岩村だと想定されるので、時代設定は、彼がそこにいた大正五年（一九一六）ごろと推定される。ただし谷崎潤一郎の小説「詩人のわかれ」（『新小説』大正六年「一九一七」三月）に、白秋をモデルにした人物が、『紺天鶯絨のダブルクロオズに、ピンク色の土耳其帽を冠りながら、恰も長崎の「阿蘭陀人」のやうな風采になつて現はれました』とあり、また短歌雑誌『煙草の花』第二号（大正五年「一九一六」十二月）に掲載されている写真をみても、トルコ帽をかぶり、ビロードと思われる服を着ているところから、このころの白秋は、まだルバーシカを着てはいなかった可能性がよい。ただし、昭和三年（一九二八）春頃に撮影されたと推測されている写真のなかで彼が着ているルバーシカが、『葛飾文章』の記述とよく似ていることから、少なくとも大正八年（一九一七）までには、これを入手していたのではないかと考えられる²⁰。

いうまでもなく、白秋のルバーシカは、『露西亞の地主気取で』とあるように、左翼運動とはまったく関係ない、ただのエキゾチズムのしるしであった。だがこれを入手したのが大正五年（一九一六）から同八年（一九一七）のあ

いだである可能性が高いという事実は、ロシア革命をはさむこの時期にたかまつた「ロシア」のインパクトのうちから、白秋が巧みにエキゾチズムの側面を嗅ぎとっていたことを示しているといえよう。

もっとも、革命のインパクトのうちに日本人が喚起した「ロシア」のイメージは、『黎明』のなかで、レーニンを語るのに十九世紀のロシア文学が呼び起こされているように、すでに知られているイメージを当てはめているにすぎない。白秋の『露西亞の地主気取』ということばが、それを的確に言い当てている。

結局、青年たちが気取るコスモポリタニズムは、単に「日本ではない」という限りで新しいのであって、彼らには、当のロシアが乗りこえようとした「古き」を身にまといているという自覚は、まったく見られない。あたりまえのことだが、日本人にとって「ロシア」はしよせん「ロシア」にすぎず、我がことではない。そして革命が起きるまでは、芝居や小説といった異空間にある世界でしかなかった。

その非日常的かつ非日本的なルバーシカを、日本の青年たちが普段着とすることが、十月革命以降おこなわれたということは、芝居や小説の中の出来事が、革命という祝祭気分によって、青年たちの日常生活のレベルにまで持

ち込まれるようになったことを表わす。

つまりプロレタリア革命が、空想ではなく、現実に起きたという驚きこそ、十月革命がひとびとにあたえた衝撃の核心であることを、ルバーシカ着用の流行現象は物語っているのである。

※本稿は、来日ロシア人研究会会報『異郷』第二十三号（二〇〇七年四月）に掲載された拙稿「ルバーシカを着る青年たち」を、大幅に追加・改稿したものである。

【註】

1 『平林たい子全集1』潮出版社、一九七九年四月、五四頁。

2 大谷晃一『評伝武田麟太郎』河出書房新社、一九八二年十月、八八頁。

3 小野忠重「絵の中の日本とロシアⅢ——山本鼎のころ——」（『窓』一九七五年三月）から孫引き。一部表記を改めた。

4 メドヴェージェフ、ロイ『1917年のロシア革命』石井規衛・沼野充義監訳、北川和美・横山陽子訳、現代思潮社、一九九八年九月、二〇頁。

5 藤本和貴夫・松原広志『ロシア近現代史——ビョートル大帝から現代まで——』ミネルヴァ書房、一九九九年六月、一九五頁。

6 原暉之『シベリア出兵——革命と干渉一九一七—一九二二』筑摩書房、一九八九年六月、六七頁参照。

7 前傾原二二頁。

8 ジョン・リードの有名な著書Ten days that shock the world. 1926（『世界をゆるがした十日間』）のタイトルから。

9 大正デモクラシー期の定義とその意義について、三谷太一郎は次のようにのべている。《（…）大正デモクラシーはこれを二つの局面に分けて考えることができる。一つは政友会が藩閥系勢力との間に広義の政権交代路線を布いた明治三十八年から護憲三派内閣成立によってこのような路線が最終的に清算され、政党間における政権交代路線がこれに代った大正十三（一九二四）年にいたる政党内閣制確立過程であり、またもう一つはこれと相互に影響し合いながら進化した大正七年から十五年にいたる大正デモクラシー運動およびそれを媒介とする無産政党形成過程である。大正十四年の普通選挙制の成立はこれら二つの過程の交錯点であった。こうして大正デモクラシーは、総じてこれを日本における政党制（party system）の確立過程としてとらえることができる。》（『新版大正デモクラシー論——吉野作造の時代——』東京大学出版会、一九九五年二月、四頁）

10 三谷『新版大正デモクラシー論——吉野作造の時代——』二五頁。

11 秋庭太郎『日本新劇史』下巻理想社、一九五六年十一月、二四一頁。

12 引用は『小山内薫演劇論全集』第1巻、未来社、一九六四年十一月、二三頁。

13 初出は小山内薫『旧劇と新劇』玄文社、一九一九年一月。引用は『小山内薫演劇論全集』第1巻、八〇頁。

14 初出『新思潮』明治四十四年（一九二一）一月。引用は『小山

内薫演劇論全集』第1巻、未來社、一九六四年十一月、一三二頁から。

15 宮下啓三・小平麻衣子「絵葉書が証言する小山内薫の洋行——慶応義塾図書館蔵の演劇絵葉書についての報告——」(『芸文研究』一九九五年十二月)。

16 『小山内薫演劇論全集』第1巻、一三一頁。

17 『小山内薫演劇論全集』第1巻、七四頁。

18 秋庭『日本新劇史』下巻一六三〜一六四頁参照。

19 『小山内薫演劇論全集』第1巻、八〇頁。

20 以上は、萩田義雄『評伝北原白秋』(玉川学園出版部、一九七八年四月)および『新潮日本文学アルバム25 北原白秋』(新潮社、一九八六年三月)を主に参照した。